

# 平成十三年歌会始御製御歌及び詠進歌

草

御製

父母の愛めでましし花思わひつつ我妹わぎもと那須の草原くさはらを行く

皇后陛下御歌

この日より任務みそおびたる若き衛士ゑじの立てる御苑みそのに新草にひくさ萌ゆる

皇太子殿下

草原をたてがみなびかせひた走るアラブの馬は海越えて来ぬ

皇太子妃殿下

君とゆく那須の花野にあたらしき秋草の名を知りてうれしき

文仁親王殿下

旅先の草木さうもく深き川縁かはべりに魚釣りつつ吾子らは遊ぶ

文仁親王妃紀子殿下

草ふかき山の斜面なだりをのぼりきて苗木を植うる土あたたかし

清子内親王殿下

ほどもなく夕立ちやせむみそのふに草の香あをくたちのぼりくる

正仁親王殿下

御園生の夜露にぬれし草の間にほたるの光青白く見ゆ

正仁親王妃華子殿下  
雑草といふ草はあらずといひたまひし先の帝さきみかどをわが偲ぶなり

崇仁親王妃百合子殿下  
雪降らばゲレンデとなる丘を来て松虫草のこもり咲く見つ

寛仁親王妃信子殿下  
村の道そぞろにゆけば草笛ののどかにきこゆ春ふかき午后

憲仁親王殿下  
駆けまはる仔馬しづかに見守りて母馬は食む新緑の草

憲仁親王妃久子殿下  
アカシアの樹をもとめつつ草原をゆらりゆらりと麒麟あゆめり

召人 上田正昭  
山川も草木も人も共生のいのち輝け新しき世に

選者 武川忠一  
湧く水をひきて凍らぬ高はらに萌ゆる若草馬はいなくな

選者 安永露子  
見ゆるものみなうつくしき春の夜や月下げっかの湖うみにそよぐ水草

選者 岡野弘彦  
うら若くかの草かげに果てゆきし友のころを継ぎて生ききぬ

選者 岡井 隆  
渡り来て約三千の夕鶴の草の穂がくり草の実を食む

選者 島田修二  
ひとり来て多摩の丘の辺くさむらの一輪草をしまらくは見む

選 歌 (詠進者生年月日順)

三重県 中井 勇  
背に付きし草の実妻と取り合ひて日の入り早き山を下りぬ

東京都 小山孝子  
あやまたず明日は来たらむゑのころ草金に輝く長き黄昏

島根県 竹田 弘  
イザヤ書に人は草にて枯るとふくだりを読み明の燈を消す

大阪府 田中二三子  
草いきれ車内に充ちてここよりは單線となる山峡の駅

千葉県 高野伊津子  
草はらに生れしばかりの仔馬立ち母より低き世界を見てゐる

定年の朝もつとも華やげと草染めのシャツ夫に縫ひをり  
埼玉県 淵野里子

野兎の草踏む音ぞ聞こえ来る風無き冬の夜深くして  
高知県 大野 正

ぎこちなき歩みなれども子は追へりゆらりと川面をゆく草の舟  
静岡県 小池正利

身ごもりて目に入るものあたらしき名もなき草の金のさざ波  
神奈川県 古山智子

青春のまつただ中に今はある自分といふ草育てるために  
兵庫県 後藤栄晴

佳 作 (詠進者生年月日順)

草色の褪せし軍服一式を箆筒の底に捨て難く持つ  
静岡県 小楠秀尾

在りし日を夫の使ひし草刈機唸りて今朝も吾と働く  
大分県 土肥マツ子

我れ見つめ差出す草を手ごと舐め背筋通りし此の子牛買ふ  
愛媛県 西口六平

草萌えを待つ村人ら野の神に水まゐらせて野を焼きにけり  
埼玉県 小野田きゑ子

年どしに遠くなりゆくふる里へ孫とならびて草矢を放つ  
大阪府 山本 廣

宮城県 長栄つや

峽の田の草稗抜くとこのあした垂るる稲穂を膝に分けゆく

広島県 岡崎隆代

ペダル踏み夜半の山道急ぎたり草深き家に産婦待ちちゐて

神奈川県 加藤美智子

深閑と時戻りゆく資料館枕草子の古筆に真向ふ

静岡県 佐藤正枝

茄子を採るわが腕に来て草蜉蝣みどりに透ける羽をたたためり

大阪府 佐藤多恵子

草に手を切らるることも草笛もはじめて知りぬ疎開の日々に

石川県 丹羽千枝子

海原を越え来し風は刈草の上に置く詩集捲りてゆけり

京都府 森 敬一

露おもき山草ふめば出立の法螺はひびかふ霧のむかうに

岡山県 三浦尚子

丈高き草のむかうに白雲とプールびらきの子供らひかる

オランダ王国  
アムステルダム市 原 知子

夕暮れに我を見つけて抱きつきし子らの体に染みる草の香